

実 施 報 告 書

泰阜村立学校美術館

キッズ学芸員とシンビストによる
収蔵作品展プロジェクト

ぼくたち・わたしたちがつくる
『やすび』企画展

信州アーツカウンシル
(一般財団法人長野県文化振興事業団)

発行日 2026年3月10日

発 行 信州アーツカウンシル(一般財団法人長野県文化振興事業団)

〒380-0928 長野県長野市若里1-1-4 県立長野図書館内1階

一般財団法人長野県文化振興事業団アーツカウンシル推進局

TEL 026-223-2111 FAX 026-223-2112

©一般財団法人長野県文化振興事業団

カルチャー・ドット・ナガノ
「シンビズム6」映像



学校と美術、
レガシーを未来へ

長野県内美術館・博物館等の学芸員が所属を越えて交流し、同じ立場で協議しながら信州ゆかりの出品作家を選定、紹介する企画展とその活動がシンビズムです。長野県芸術監督の故本江邦夫氏のもと2016年からはじまったもので、本江氏の「全国一のミュージアム数を有し、学芸員が一人体制の館が多い長野県においては、学芸員同士の分け隔てない関係構築こそがミュージアム・ネットワーク化の一番の近道である」との思いが礎となっています。2025年の第6回までに延べ263名の学芸員(シンビスト)が参加し、延べ24会場で全85名の作家を紹介してきました。



*「シンビズム」には「信州の美術の主義」のほか、新しい美術、真の美術、親しい美術等の意味を込めています

シンビズム 6 第 2 部学校連携プログラム

シンビズムでは、2023 年から長野県「アートの手法を活用した学び」推進事業の一環として、学校での対話鑑賞の普及を目的に、教員向けワークショップの実施やモデル校へのファシリテーターの派遣などの学校連携プログラムを実施してきました。「地域と美術」をテーマに据えた第6回のシンビズムにおいても、企画展のほか第2部として学校連携プログラムを企画。泰阜村立泰阜小学校で「泰阜村立学校美術館事業ーキッズ学芸員とシンビストによる収蔵作品展プロジェクトー」を実施しました。



泰阜村立学校美術館

泰阜村立泰阜小学校校内に敷設されている美術館で、地元出身の彫刻家・倉澤興世による少女像《偲》をはじめ、飯田下伊那地域の芸術家による日本画、洋画、書など約1,000余点を収蔵。これら収蔵作品は子どもの情操教育のためにと、地域住民が寄付や寄贈によって集めたものです。「将来、村を背負って立つ子ども達の夢や愛を豊かに膨らませてやるのが大事」という村民らの思いのもと、24年の歳月をかけて1954年に開館しました。その後、建物の老朽化、小学校の統廃合などを経て、2010年に現在の泰阜小学校校内に美術館展示室及び所蔵庫が移設・設置されました。



シンビズム6の第2部学校連携プログラムとして実施された事業。泰阜村立学校美術館に収蔵されている作品のうち先生方が選んだ40点に、飯田創造館より新たに寄贈された10点を加えた計50作品を展示作品候補とし、全校児童を対象にした授業のほか美術館・環境委員会の児童との活動を経て、秋の収蔵作品展をつくりあげました。作品選定や展示構成、展覧会のキャッチコピーやポスターなどの広報物制作まで行い、展覧会づくりのプロセスを体験しながら実施しました。

実施プログラム一覧

No.	日付	回	事業内容	参加人数		備考
				一般	児童	
	5月13日	会議	打ち合わせ会議	8	—	会 場 泰阜村立学校美術館 参加者 シンビズムWG学芸員*1 4人、事務局2人 小学校…小林校長、塩沢教頭
1	6月12日	第1回 (授業)	「アートカードゲームで遊ぼう!」 「収蔵作品展をみんなで作ろう!」	32	84	会 場 泰阜村立泰阜小学校・泰阜村立学校美術館 参加者 児童84人、シンビズムWG学芸員7人、事務局*2 2人、 原田教育長、学校美術館運営審議会6人、報道2人 小学校…小林校長、塩沢教頭、教職員12人
2	6月16日	第2回 (授業)	「展示作品を決めよう①」 「選んだ作品をみんなに伝えよう」	36	84	会 場 泰阜村立泰阜小学校 参加者 児童84人、シンビズムWG学芸員11人、事務局3人、 教育長、学校美術館運営審議会6人、報道2人 小学校…小林校長、塩沢教頭、教職員12人
	6月20日	Zoom MTG	美術館・環境委員会 「展示作品を決めよう②」に向けて *Zoomミーティング	9	11	会 場 Zoomミーティング 参加者 美術館・環境委員会児童11人、シンビズムWG学芸員5人、 事務局2人 小学校…塩沢教頭、教員1人
3	6月26日	第3回	美術館・環境委員会 「展示作品を決めよう②」	9	11	会 場 泰阜村立学校美術館 参加者 美術館・環境委員会児童11人、シンビズムWG学芸員5人、 事務局1人 小学校…小林校長、塩沢教頭、教職員1人
4	7月10日	第4回	美術館・環境委員会 「展示作品を決めよう③」 「展覧会メッセージを決めよう」	10	11	会 場 泰阜村立学校美術館 参加者 美術館・環境委員会児童11人、シンビズムWG学芸員5人、 事務局2人 小学校…小林校長、塩沢教頭、教職員1人
5	9月24日	第5回	美術館・環境委員会 「作品を展示しよう」	16	12	会 場 泰阜村立学校美術館 参加者 美術館・環境委員会児童12人、美術館委員会5人、 シンビズムWG学芸員3人、事務局2人 小学校…小林校長、塩沢教頭、教職員4人
	9月25日～ 11月26日	企画展	ぼくたち・わたしたちがつくる 『やすび』企画展			プログラムを踏まえて実施した秋の特別展示 *期間中は土日も開館、2026年2月までは平日開館
6	9月28日	第6回	保護者・一般参加 「作品をみながら、おしゃべりしよう」	25	—	会 場 泰阜村立学校美術館 参加者 美術館・環境委員会児童16人、シンビズムWG学芸員2人、 サポーター*3 2人、事務局2人、原田教育長 小学校…小林校長、塩沢教頭、木下忠彦館長、学校美術 館運営審議会
7	9月29日	第7回 (授業)	「作品をみながら、おしゃべりしよう」	18	72	会 場 泰阜村立泰阜小学校 参加者 児童72人、シンビズムWG学芸員5人、 事務局2人、報道2人 小学校…小林校長、塩沢教頭、教職員6人
参加者数				163	285	*延べシンビズム学芸員参加(47名+事務局兼1名×9回)=56名
参加者合計				448		

*1 シンビズムワーキンググループ学芸員 *2 一般財団法人長野県文化振興事業団芸術文化推進室 *3 茅野市美術館サポーター美道com.

泰阜村立学校美術館 「貧すれども貪せず」の精神が薫る美術館

泰阜村立泰阜小学校 校長
小林一博



1929年10月にアメリカではじまった世界恐慌による不況は、農山村の貴重な現金収入源であった養蚕業に深刻な打撃を与え、日本中が窮乏状態になりました。泰阜村でも、学校を休んだり弁当を持ってこられなくなったりする子どもがいました。このような状況下で、学校の先生方に対し「村が負担していた教員給与の1割を村へ寄付するように」との議決がなされました。当時の泰阜北小学校の吉川宗一校長は、単に村に寄付するのではなく「将来、村を背負って立つ子どもたちの夢や愛を豊かに膨らませてやるため」に使うことを考えました。そのきっかけになったのが倉澤量世氏(後に興世と改名)の少女像《^{しのび}偲》です。

倉澤は泰阜村に生まれ、当時「帝展」に連続入選するまでになっていた彫刻家です。母校の校舍改築のお祝いに《偲》(1926年3回目の帝展入選作)を寄贈してくださいました。この像を見て感動した吉川校長は、「絵や彫刻にふれることで人間としての心根を豊かにしていくこと」の必要性を感じていました。そして「貧しいけれども心は貪しない」という信念で美術品を集め、子どもたちの情操教育を行うと同時に、将来はこの地に美術館を建設したいということを、村議会に建言したのです。

反対はあったものの、この事業については学校に任せることになり、有名な作家の絵や書を買うことになりました。購入第1号は、菱田春草の姪・菱田きくの《紫陽花》でした。その後も子どもたちから寄付金が集められた

り、倉澤が東京で知人や著名な作家に作品の寄贈を求めたりしました。このように先生方や村民をはじめ、多くの人びとの協力で丸山晚霞や中村不折など、次第に高名な作家の作品が増えていきました。しかし、戦争の気配が濃くなるとともに、美術品は封印されてしまったのです。

時が流れ1951年、美術品が封印されたままなのを残念に思った当時の泰阜北小学校の久保田倫校長は、泰阜北中学校の坂牧和一校長とともに美術館の再興を計画しました。しかし、翌年は冷夏で大冷害のため賛同が得にくく寄付も集まらず、計画は中断。事情を知った卒業生たちが、自らの厳しい生活のなかから寄付金を送ってくれました。なかには、自分の山から木材を切り出してくれた人もいました。こうしたことにより再び建設の気運が盛り上がり、反対者を説得して美術館建設が実行に移されたのです。そして、1954年、出発から実に24年後、村の内外の協力を得て、泰阜北小学校の裏山に宇治の平等院鳳凰堂を模した美しい「学校美術館」が建てられたのです。

その後、美術館老朽化のため、1975年の泰阜北小学校の校舍改築にあわせて校舍昇降口2階に展示室を設置し、作品を移しました。以後も、作品の寄付や購入があり、また、表装や鋳造など作品修理も続けられました。



左／1954年に建てられた学校美術館
下／1960年代の作品鑑賞の様子



2010年4月、泰阜南・北小学校の統合に伴い、新たに泰阜小学校が、泰阜中学校(1993年に泰阜北中・泰阜南中の統合により開校)に併設されました。泰阜北小学校裏山に建設された学校美術館は56年の歴史を終え、作品は泰阜小学校展示室へ移転されました。さらに2023年6月には展示室横に別館が建設され、収蔵作品の整理が行われています。現在では収蔵作品が約1000点となり、村民のみならず、県の内外から来館者が鑑賞に訪れるようになりました。毎年、小学校運動会・中学校文化祭のある期間中(土日・祝日も含む)に、学校美術館運営審議会による企画展も実施されています。中学校の生徒が選定した収蔵作品を、中学校校舎内に展示する活動も行われています。これらを通して、子どもたちにとって新しい作品との出会いの場となっています。

2025年4月より、学校美術館をプラットフォームとした新たな取り組みもはじまりました。泰阜小学校児童会に美術館・環境委員会が立ちあがり、子どもたちが美術館の運営や企画にかかわっています。より親しみや

すい学校美術館をめざし、子どもたちによるロゴマークの発案、展示作品人気ランキングイベント、学校美術館アートカード制作に向けた作品選定、毎朝の館内清掃などが行われています。子どもたちによる企画展も、学校美術館運営審議会の協力を得ながら行っていく予定です。

対話鑑賞による美術館作品の鑑賞タイム(朝鑑賞)も、毎月1回、朝の時間に行っています。担任が作品選定・ファシリテーターを行っています。今後、子どもたちが進める鑑賞タイムをめざしています。

今日も、先人たちが自らの生活苦と引き換えに後世の子どもたちに残していった美術品を、楽しそうに鑑賞している子どもたちがいます。このことが後世へと受け継いでいく最大の財産だと思っています。

第1回

「アートカードゲームで遊ぼう！」 「収蔵作品展をみんなで作ろう！」

日時：2025年6月12日（木） 対象：全校児童84人

学校関係者：小林一博校長先生、塩沢潤知教頭先生ほか、原田瑞穂教育長、木下忠彦館長、学校美術館運営審議会委員ほか

- ファシリテーター：由井はる奈（佐久市立近代美術館）、山崎麻由・小沢和実（東御市文化・スポーツ振興課）、坂口佳奈（木祖村教育委員会）、前田忠史・中田麻衣子（茅野市美術館）、梨本有見（一般財団法人長野県文化振興事業団）
- スタッフ（記録・ガイドス）：伊藤羊子・畔上恵美子（一般財団法人長野県文化振興事業団）
- タイムスケジュール：直前打合せ[60分]→プログラム[40分（導入5分／展開30分／まとめ5分）*2本]→振り返り[40分]
- 概要：学年混合で1～8班（10～13人／班）に分かれ、1～4班は3時間目「アートカードゲームで遊ぼう！」4時間目「収蔵作品展をみんなで作ろう！」を実施し、5～8班は3時間目と4時間目を逆にして実施した。

「アートカードゲームで遊ぼう！」

目的 ゲーム感覚で作品に親しみ、作品を知る

実施内容 班員を「低学年」「中学年」「高学年」チームに分ける
▶アートカード（全50枚）を各チームに5～8枚配布する▶中央に1枚「元カード」を表向きに置く▶各チームが順番に「元カード」と似ている点があると思われる手持ちカードを3枚選ぶ▶元カードの隣に置き、似ている点を説明する（例…人がいる、直線がある、木があるなど）

備品 アートカード（50枚、収蔵品40点+飯田創造館からの新規収蔵品10点）

ポイント 各チームで作品をよく見て似ている部分を探し、話し合うようにする



授業のはじめに
あたりファシリテーターから
説明を実施

授業の様子

ゲーム形式で、アートカードを見比べて作品同士の類似点や相違点を探ったほか、美術館内で実物の作品をみながら、気づいたことや発見したことを言葉にして共有し合う対話鑑賞も行った。また、収蔵作品展をつくるにあたって行うことや、学校美術館の特色について共有した。これらを通じて作品展に向けて作品や美術館との距離を縮めつつ、児童らが主体となって展覧会をつくるうえでの下地をつくった。

学校美術館の歴史については、自分が知っていることを口々にし、対話鑑賞でも思うことを低学年中心にどんどん発言していく姿があった。

「収蔵作品展をみんなで作ろう！」

目的 授業の着地点を知り、作品への理解を深める

実施内容 授業でどんなことを行うのかを知る▶泰阜村立学校美術館について知る▶2グループに分かれて、対話鑑賞を行う

備品 鑑賞ポイントの説明カード

ポイント 作品をよく見ること。自分が感じたこと、考えたことを言葉にする



上／対話鑑賞で気をつけたいことをカードをみせながら説明
下／積極的に手を挙げて発言してくれる対話鑑賞の様子

第2回

「展示作品を決めよう①」 「選んだ作品をみんなに伝えよう」

日時：2025年6月16日（月） 対象：全校児童84人

学校関係者：小林一博校長先生、塩沢潤知教頭先生ほか、原田瑞穂教育長、木下忠彦館長、学校美術館運営審議会委員ほか

- ファシリテーター：由井はる奈（佐久市立近代美術館）、山崎麻由・小沢和実（東御市文化・スポーツ振興課）、坂口佳奈（木祖村教育委員会）、富永淳子（安曇野高橋節郎記念美術館）、鷹野雪菜、前田忠史・中田麻衣子（茅野市美術館）、早川綾音・梨本有見（一般財団法人長野県文化振興事業団）
- スタッフ（記録・ガイドス）：伊藤羊子・畔上恵美子（一般財団法人長野県文化振興事業団）、伊藤幸穂（シンビズムアシスタントコーディネーター、木曾ミュージアムサポート）
- タイムスケジュール：直前打合せ[60分]→プログラム[40分（導入5分／展開30分／まとめ5分）*2本]→振り返り[40分]
- 概要：学年混合で1～8班（10～13人／班）に分かれ、班ごとに作品を選んで選定理由をまとめたのち、全校生徒で集まりそれぞれが発表する。

「展示作品を決めよう①」

目的 それぞれの思いをまとめる

実施内容 班ごとにアートカードのなかから展示したい作品を選ぶ▶ワークシートに選定理由をまとめていく

備品 アートカード

ポイント 「作品を展示してみせる」ということを意識して作品を選び、その理由を共有すること、そのうえでさらに考えること大切にする



各班にファシリテーターがついて作品を選んでいく

授業の様子

班内でさらにグループに分かれる班、分けない班があるなど、それぞれの手法で作品を絞り込んだ。自分の「好き」や「伝えたい」という率直な思いを起点に意見を出し合い、時に譲り合いながら選定を進めた。意見が分かれる場面でも、選定理由を共有し尊重する姿勢がみられた。自分が選んだ作品が選ばなかった児童らにも、自身の視点に自信を持ってほしいのでフォローが必須だが難しく、先生にもサポートに入っていた。選定の過程に人間模様があり、そのものが貴重な学びの機会となった。

「選んだ作品をみんなに伝えよう」

目的 互いに尊重・理解しながら作品を選定する

実施内容 各班の代表が選んだ作品を全体に向けて発表し、作品を全員で共有する▶ほかの班から「なぜその作品を選定したか？」を質問してもらい、選定理由も全員で共有する

備品 アートカード

ポイント 自分たちが選んだ作品とほかの班が選んだ作品を比較し、共通点や相違点を考えながら発表を聞くようにする



左／全校生徒の前で班の代表が
選んだ作品と理由を発表
下／全8班に分かれて行った



授業の様子

6年生を中心に、伝わりやすい発表を考え工夫する様子が見られた。ほかの班の作品とその選んだ理由を聞きながら同じ作品だと喜ぶ一方、選定理由が違うこと・違う作品を選んだ理由なども興味深く聞き、あらためて考える姿も見られた。自分で考え、選び、伝える、共感するという過程はほかの学習にも生きてくるという評価を先生方からいただいたが、集中力を継続させることについては課題に感じた。授業の様子や展示スペースも踏まえ、最終候補から漏れた作品も補足的に展示候補へ加えるなど、児童らの思いがより反映される形が模索された。

第3回

「展示作品を決めよう②」

日時：2025年6月26日（木） 対象：美術館・環境委員会 児童11人（3～6年生）
学校関係者：小林一博校長先生、塩沢潤知教頭先生、唐澤愛咲先生ほか

- ファシリテーター：鷹野雪菜、中田麻衣子（茅野市美術館）、早川綾音（一般財団法人長野県文化振興事業団）
- スタッフ（記録・ガイダンス）：前田忠史（茅野市美術館）、伊藤羊子（一般財団法人長野県文化振興事業団）、伊藤幸穂（シンビズムアシスタントコーディネーター、木曾ミュージアムサポート）
- タイムスケジュール：直前打合せ[60分]→プログラム[30分（導入3分／展開25分／まとめ2分）]→振り返り[30分]
- 概要：第1回、第2回で各班から上がってきた作品のなかから実際に飾る作品を絞り込む。

「展示作品を決めよう②」

目的 展覧会に向けて作品を絞り込む

実施内容 アートカードを並べ、候補作品を確認する▶候補作品のなかから絞り込んだ作品を互いに提案する▶展示スペースの図面に作品を配置し、候補作品を調整する▶作品を確定する▶次回の予告をし、宿題（チラシのメッセージ、掲載希望作品）を課す

備品 アートカード2セット、模造紙、展示スペースのイメージ図面

ポイント 展示作品から思い浮かぶ言葉を考えてきてほしいと伝える



委員会の児童らとともに作品を選んでいく



学芸員（シンビスト）でファシリテーターの中田麻衣子さん（写真奥左から5人目）の進行で進められていく



展示スペースのイメージ図面にアートカードを置きながら考える児童たち

委員会の様子

2回の授業までに各班（8つ）が3枚ずつ出した作品も踏まえながら、展覧会に掲示する作品を絞り込んでいった。実際に飾る展示室においてその空間を見渡ししながら、作品サイズ・展示スペースなどを考え、検討していった。
図面を用いて作品の配置を考える場面では、「入口には色のある絵の方がいい」「この作品は大きいけどここに入るかな?」「隣は似ている作品がいい」など、具体的な提案を交わしながら、互いの希望を調整していった。

第4回

「展示作品を決めよう③」 「展覧会メッセージを決めよう」

日時：2025年7月10日（木） 対象：美術館・環境委員会 児童11人（3～6年生）
学校関係者：小林一博校長先生、塩沢潤知教頭先生、唐澤愛咲先生ほか

- ファシリテーター：中田麻衣子（茅野市美術館）、早川綾音・梨本有見（一般財団法人長野県文化振興事業団）
- スタッフ（記録・ガイダンス）：前田忠史（茅野市美術館）、伊藤羊子・畔上恵美子（一般財団法人長野県文化振興事業団）、伊藤幸穂（シンビズムアシスタントコーディネーター、木曾ミュージアムサポート）
- タイムスケジュール：直前打合せ[60分]→プログラム[30分（展開27分／まとめ3分）]→振り返り[30分]
- 概要：考えてきたメッセージ、掲載希望作品を共有して絞り込む。

「展示作品を決めよう③」

目的 展覧会に向けて作品を絞り込む

実施内容 前回絞り込みきれなかった作品を整理する

備品 アートカード2セット、展示スペースのイメージ図面

ポイント イメージ図面から展示順番がみやすいか想像してみる



ファシリテーターが用意した簡易なイメージ図面にアートカードを配置しながら作品を絞り込む

委員会の様子

展示スペースのイメージ図面を見渡し、作品のサイズ感をイメージしながら意見を交わしていった。

「展覧会メッセージを決めよう」

目的 チラシ制作に向けて展覧会テーマを整理する

実施内容 どんな言葉が思いついたかを共有する▶メッセージの内容を決める▶チラシに載せる作品を決める

備品 見本となる展覧会のポスター

ポイント 「どんな展覧会であるか」をみんなで共有し、相手に伝わる言葉を考える



ほかの展覧会のポスターを参考にしながら自分たちの展覧会のメッセージを考えていく

委員会の様子

自分たちの展示をどう伝えるのがいいのか、学芸員たちも悩むところに挑戦。「まずは何を伝えたいかを決めたらいいと思う」というひとりの児童の発言から意見を交わしていき、展覧会のタイトル、チラシ掲載作品が決まっていた。



美術館・環境委員会の児童によって制作された展覧会メッセージ

第5回

「作品を展示しよう」

日時：2025年9月24日（水） 対象：美術館・環境委員会 児童12人（3～6年生）

学校関係者：小林一博校長先生、塩沢潤知教頭先生、唐澤愛咲先生ほか、学校美術館運営審議会委員ほか

- ファシリテーター：中田麻衣子（茅野市美術館）、早川綾音（一般財団法人長野県文化振興事業団）
- スタッフ（記録・ガイダンス）：前田忠史（茅野市美術館）、伊藤羊子・畔上恵美子（一般財団法人長野県文化振興事業団）
- タイムスケジュール：直前打合せ[60分]→プログラム[30分（導入2分／展開25分／まとめ3分）]→振り返り[30分]
- 概要：美術館・環境委員会が展示作業の見学を行い、実際に作品に触れてみる。

「作品を展示しよう」

目的 展示作業の大変さと面白さの両面を知ってもらう

実施内容 作品の取り扱い方を知り、作品を開梱する▶実際の作品の並び順をみて、位置を検討する

備品 展示スペースのイメージ図面

ポイント 鑑賞者の気持ちになって考えてみる

委員会の様子

実際に作品を箱から出してみる体験をし、並んだ作品を眺めて、鑑賞者の立場をイメージしながら展示順番を決めた。



上／ファシリテーターと先生方によって展示作業が進められていく
下／梱包されている作品を開けてみる児童たち



第6回

「作品をみながら、おしゃべりしよう」

日時：2025年9月28日（日） 対象：保護者・一般25人

学校関係者：小林一博校長先生、塩沢潤知教頭先生

- ファシリテーター：中田麻衣子（茅野市美術館）、荻原陽子・関志津子（茅野市美術館サポーター美遊com.）
- スタッフ（記録・ガイダンス）：伊藤羊子・畔上恵美子・早川綾音（一般財団法人長野県文化振興事業団）
- タイムスケジュール：直前打合せ[60分]→プログラム[60分（導入5分／展開45分／まとめ10分）]→振り返り[60分]
- 概要：一般向けに対話鑑賞を行う。

「作品をみながら、おしゃべりしよう」

目的 対話鑑賞の楽しさを知ってもらいファシリテーター養成の必要性を共有する

実施内容 ファシリテーターによる自己紹介▶約6人ずつのグループに参加者を分ける▶対話鑑賞を実施する▶対話鑑賞におけるファシリテーターのポイントを解説▶参加者に感想を述べてもらう▶泰阜村立学校美術館でのファシリテーター養成について提案

ポイント 対話鑑賞がどういうものなのかを知ってもらう



25人もの一般参加者が対話鑑賞を行った

イベントの様子

卒業生を含む地元の方ほか、村外からもご参加いただいた。地元の方は小さい頃から作品と美術館に慣れ親しんでいるせいか、話しながら鑑賞する様子が非常に自然体だった。村の自慢のように作品や美術館のことを話す様子も印象的で、誇りを持ち若い世代にも伝えていきたいという強い思いも感じた。

泰阜村では好き嫌いの枠を越えて美術が人々に浸透している。他地域でこうした環境がつかれるのか、シンビズムがどうサポートしていけるのか、その可能性を考えさせられた。

ファシリテーターの進め方によって異なる展開が生まれたり、地元の方が自然とファシリテーターの役割を担う瞬間があるなど、対話鑑賞の方法論において可能性は限りなく、学ぶことが多い時間となった。

第7回

「作品をみながら、おしゃべりしよう」

日時：2025年9月29日（月） 対象：全校児童72人

学校関係者：小林一博校長先生、塩沢潤知教頭先生ほか、原田瑞穂教育長、木下忠彦館長、学校美術館運営審議会委員ほか

- ファシリテーター：坂口佳奈（木祖村教育委員会）、富永淳子（安曇野高橋節郎記念美術館）、小松由以（高遠町公民館）、中田麻衣子（茅野市美術館）、早川綾音（一般財団法人長野県文化振興事業団）
- スタッフ（記録・ガイダンス）：伊藤羊子・畔上恵美子（一般財団法人長野県文化振興事業団）
- タイムスケジュール：直前打合せ[60分]→プログラム[45分（導入3分／展開27分／まとめ3分）]→振り返り[60分]
- 概要：1・2年生、3・4年生、5・6年生の3回に分けて対話鑑賞を実施。

「作品をみながら、おしゃべりしよう」

目的 作品や展覧会の楽しみ方を知ってもらう

実施内容 ファシリテーターによる自己紹介▶1グループを約6人に分ける▶対話鑑賞を実施する▶展覧会に向けたスケジュールを説明する

ポイント 感じたこと、考えたことを言葉にし、「どこからそう思うのか」を考えて、根拠をもって話すようにする



彫刻作品などに触れながら鑑賞できる学校美術館は類稀な環境

授業の様子

低学年は見たものをそのまま、しかし的確に伝えてくれた。学年が上がるにつれ作者の思いや素材、鑑賞方法など着眼点が広がる傾向にあった。高学年になると意見を言いつらそうにしている児童も多かったが、それぞれに感じたことは確実にあり、それを共有させることが今後の課題のひとつでもあった。低学年をはじめ集中を続けられない児童もいたが、作品が変わるなどのきっかけがあると目を向けてくれる場合もあった。

嫌いな作品を口にしない児童らの姿を見て、先生方が、元来とても優しい子どもたちで、かつ少人数で互いを理解し合いやすいという泰阜小ならではの環境が、授業の様子にも関係していると推察してくださった。

児童にとって学校美術館は「自分たちの居場所」であることから、寝転がって話したり彫刻に触れたりリラクセスして参加する児童らの姿があった。アートカードゲームでファシリテーターとすでに交流があったこともあるが、それだけではない、一朝一夕には生まれない雰囲気があった。

プログラムに参加して ー 児童の感想 ー

泰阜小学校では2025年に「美術館・環境委員会」が設置されました。3年生以上の児童12人（実施当時）で構成され、日常的に美術館の運営や展示活動に関わっています。今回のプログラムでも、展示構成の決定をはじめ、重要な役割を担っていただきました。12人の児童の感想をここにご紹介します。



6年 大倉すみれ(美術館・環境委員会 委員長)

私は作品や絵などが大好きで、シンビズムの方といっしょに、ポスターの見出しや、配置の大きさなどを考えるのがとても楽しかったです。とくに、カルタ(アートカード)の中から好きな作品を1枚選んでそれをどこにけいじするかを考えるのが大変だったけどみんなが見やすい所に、配置できました。私はシンビズムの方にさまざまなことを学びました。本当にありがとうございました。

5年 木下希莉

私はシンビズムの方たちとの活動がうまくできるのかはじめは不安に思っていたのですが、やっていく中で交流を深め、たくさんのことを教えてもらいました。作品を展示する時は作品ごとの大きさにも気をつけるといいことも分かり、勉強になりました。また、前よりも想像力がつき、美術館の絵を見るのが楽しくなりました。

4年 黒澤賢多朗

ぼくが楽しかったのは、作品の位置を決めることです。シンビズムの方が作品のカードを用意してくれて、委員会のみんなで決めました。どこに何を置くといいか、相談しながらやれて楽しかったです。自分たちだけではできないことを教えてもらえて、うれしかったです。企画展では、地域の方が来てくれて、うれしかったです。なのでまたみんなで作品をえらんでならべて地域の人に見てもらいたいと思います。

3年 牧野夏美

きかくてんの中で、わたしがむずかしいと思ったのは、作品のはいち決めです。なんでかという、全体のバランスをととのえるのが大へんだったからです。大きい作品と小さい作品をどこにおくか、シンビズムの方に教えてもらいながら、委員会で決めました。紙の上に小さくしたアートカードをならべるとだんだん分かってきました。むずかしかったけど、やさしく教えてもらえたので楽しい気持ちになりました。きかくてんを自分たちでできて楽

6年 畑上果歩

私は、絵や作品などが好きでシンビズムの方といっしょに作品を選んだり、ポスターを作ったりしてとても楽しかったです。パソコンや、カルタ(アートカード)の中から好きな作品を一つ選んでかざる場所などを選ぶのは、たいへんでした。でも、みんなで作品を選んだり、作品をかざる場所を考えたりして「すごいなあ」って思える企画展ができてよかったです。

5年 長原実タ

シンビズムの方々と企画展をやってみて、作品をかざるバランスの見方や一つの作品でも人それぞれ見方が変わるということを教わりました。私は今まで作品を見るときに、なんとなくで見ているだけだったけど、これからは、題名も見て、作者はどうゆう気持ちで作ったのかを考えながら見たいなと思いました。学校に美術館があるというのは、めずらしいと聞いたので、ずっと残ってほしいなと思いました。これからも美術館をきれいに保てるようにそうじなどをがんばりたいです。

4年 橋本珠乃璃

わたしは、シンビズムの方と協力したきかくてんをとおして、作品に親しむことができました。それぞれの作品の良さにふれて、どんどん世界に入っていく感じがして、たのしかったです。またあのような機会があれば、さんかしてみたいです。

3年 中山泰我

ぼくが、きかくてんをやってみて楽しかったことは、作品を決めることです。全校でえらばれた作品の中から、どれをてんじするか委員会で決めたことが一番思い出にのこっています。どれにするかまよってしまうくらいたくさんの作品がありました。その中から、好きな作品がえらばれてよかったです。実さいにかざってみるのもとてもわくわくして、よかったです。また自分たちでやってみたいんです。

3年 平田凌愛

ぼくが、きかくてんをやってみて楽しかったことはみんなで作品をえらんだことです。シンビズムのかたに教えてもらってアートカードの中からえらびました。なかよしはんで相談しながらえらんだのが一番心にのこりました。たくさんアートカードの中にはぼくが知らない作品がたくさんありました。カードでみた作品を実さいにてんじしてみると思ったより重かったり大きかったりしてびっくりしました。きちょうな体けんができてよかったです。

5年 福澤陽莉

私はシンビズムの方と一緒に活動したことで自信がついたことと、できるようになったことがあります。自信がついたことは絵の感想を言うときなどに、自信をもって発言できるようになりました。できるようになったことは、絵の配置を考える力がつきました。シンビズムの方々と一緒に企画展をやって、絵を見るのが好きになったし、6年生になったら、また一緒に企画展を計画したいです。

4年 宇井隆汰

ぼくが楽しくて、思い出に残っているのは、作品をえらんだことです。どうして楽しかったかと言うと、みんなでえらんだからです。初めてやったから、むずかしいのかな? と思ったけど、シンビズムの方たちが手つだってくれたし、委員会のみんなでやったら、楽しくできました。自分たちでえらんだ作品を、村の人たちが来て見てくれて、よかったです。泰阜小のみんなが絵をたくさん見てくれてうれしかったです。

4年 水野直輝

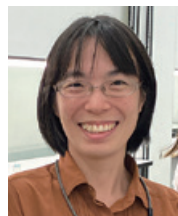
ぼくが楽しかったのは、アートカードを使って、作品を選ぶことです。1～6年生が集まるなかよし班でやりました。ぼくは、アートカードの中の馬の作品がお気に入りでした。その作品が実際にかざられることになって、うれしかったです。作品の置く場所やポスターなどは、シンビズムの方に教えてもらいました。初めてやってみて、そのすごさが分かりました。企画展のすごさが知れて、よかったです。

泰阜村立学校美術館 —キッズ学芸員とシンビストによる 収蔵作品展プロジェクト—を振り返って

02

シンビズムワーキンググループ 教育普及班リーダー
(茅野市美術館 学芸員)

中田麻衣子



本プロジェクトは、泰阜村立学校美術館の収蔵作品をシンビズムワーキンググループメンバーの学芸員とともに子どもたちが捉え直し、収蔵作品展をつくることをコンセプトに2025年5月から9月までの約4ヵ月をかけて実施した。あらためて振り返ってみると、短い期間のなかでも濃い時間を子どもたちと教職員、村民のみなさんと過ごさせてもらったと感じている。

5月13日、最初の打合せが行われた。子どもたちの実態を踏まえながらさまざまな意見を交わし、【子どもたちが展覧会をつくる】ことを着地点として設定し、それを実現するためのプログラムとスケジュールが組まれた。

本プロジェクトは、次のような流れで行った。第1・2回は全校児童へ向けての対話鑑賞とアートカードゲームを行い、展覧会で展示する作品を選んだ。第3～5回は令和7年度に児童会に新設された美術館・環境委員会の子どもたちと最終的な展示作品を決め、展覧会のキャッチコピーを考え、展示作業の一部を体験した。第6回は「作品をみながら、おしゃべりしよう」と題し、茅野市美術館サポーター「美遊com.」の2人とともに村民に向けた対話鑑賞をはじめて行った。そして第7回は全校児童に向けて対話鑑賞を行い、本プロジェクトを締めくくった。

校長の小林一博氏は「子どものためによりよい関係やつながりを生むには、何ができるかを考えていかなければならない」とし、「子どもが生き生きと各地域の文化創造を担える人でないと、その地域は廃れていくのではないと思う。今、全国的に学校の統合や小中学校の併設がされているため、将来地域から学校がなくなり、子どもたちが地域からいなくなっていき、伝統行事が行えなくなっていくのではない。文化継承を考えていくにあたり、子どもの存在はとても大事。少しでも美術館や作品を切り口に文化レベルのことやしていくのが大事なのではないかと思う。学校、美術館、地域の方とともに考えながら前に進んでいくことができれば」¹⁾と語る。

本プロジェクトを振り返ると、子どもたちは学校美術館の背景をあらためて知り、自分たちが住む地域を大事に

する気持ちを教職員や学芸員といった外部の人が関わり寄り添うなかで養うひとつの機会となったように思う。私自身は「子どもたちにとって、楽しいだろうか、面白いのだろうか」と、少々不安を感じていたが、彼ら・彼女らがどんなことを感じ、考えていたかはぜひ、コメント(p.11-12)を読んでもらいたい。

平成29年告示の学習指導要領では、小学校、中学校ともに、指導計画の作成にあたって、地域の美術館などを利用したり、連携を図ることがうたわれている²⁾。さらに、中学校の学習指導要領美術編解説には「学校と美術館等が活動のねらいをお互いに共有しながら推進することが大切である」²⁾と明記されている。今回はシンビズムワーキンググループメンバーの学芸員が学校とともに活動を行ったが、これもひとつの連携の形である。外部の人が活動に関わることで、学校のなかだけの関係では生まれない対話が起これ、より思考するきっかけが生まれたのではないだろうか。さまざまな立場の人たちと関わり言語活動を充実させることは、子どもたちの世界を広げ、生きていくうえでの選択肢を増やすことにつながるはずだ。最後に今回の活動は「泰阜村立学校美術館だからできたこと」なのだろうか。確かに泰阜小学校の児童らは学校美術館のことを「うちの館」と言うように、美術館や美術作品が身近にあり、五感を使って親しめる環境が常にある。一方で、どの学校にも絵画や彫刻等の美術作品は少なからずある。それらの美術作品を入り口として、まずは「子どもたちのために何ができるか」を、それぞれの立場から考えはじめることができればと思う。たとえば、対話鑑賞をすることもできるだろう。そこから、地域にある美術を見直すきっかけが生まれるかもしれない。今後の学校と美術館の活動のなかで、何か、活かしてもらえれば幸いである。

*1 茅野市美術館主催のアートで地域をサポートしませんか#5美術館編 第4回特別講座「学校と美術館」(2026年2月14日、講師:泰阜村立泰阜小学校校長 小林一博氏)
*2 平成29(2017)年告示の小学校学習指導要領図画工作編、中学校学習指導要領美術編「指導計画の作成と内容の取扱い」

自ら感じ、考えることで 培われた言葉にする力 そして作品をみる眼

03

泰阜村立泰阜小学校
教頭
塩沢潤知



今回の企画展では、子どもたちが作品とじっくり向き合い、自分たちの手で展覧会をつくり上げる楽しさを味わうことができました。

アートカードを使って作品を選んだり、展示する場所や並べ方を考えたりするなかで、「どうしたら見やすいかな」「この作品の良さが伝わるかな」と、自然と工夫する姿がみられました。はじめは難しそうにしていた子どもたちも、友だちやシンビズムの方々と相談を重ねるうちに、少しずつ自信をもって意見を出せるようになっていきました。

作品をみる目にも変化がありました。これまでは何気なくみていた絵や彫刻を、題名や作者の思いを想像しながら味わうことで、「みることが楽しい」「もっと知りたい」という気持ち広がりました。感想を伝え合う場面では、自分の感じたことを言葉にする姿も増え、表現することへの前向きさが育っています。また、学年をこえて活動するなかよし班や委員会での協力を通して、みんなでひとつのものをつくり上げる喜びを感じることができました。

さらに、自分たちで選び、工夫した展示を地域の方々にみてもらえたことは、大きな達成感につながり、「またやってみよう」「学校美術館を大切にしたい」という思いが子どもたちのなかに芽生えています。

今回の企画展は、学校の合い言葉である「チャレンジ」「ハートフル」「つながる」を体現する時間となりました。



作品とともに 喜びに満ちて輝く 子どもたちの笑顔

04

泰阜村立泰阜小学校
美術館・環境委員会 担当教諭
唐澤愛咲



「自分たちに企画展ができるかな?」

今年度から発足した美術館・環境委員会の挑戦がはじまりました。はじめての活動に、緊張気味だった子どもたちの姿をよく覚えています。私は委員会の担当として、子どもたちの挑戦を見守っていました。

活動のなかで、子どもたちがとくに輝いたと感じたのは、企画展のキャッチコピーを考える時間でした。選んだ作品を見ながら、シンビズムの方々のリードでキャッチコピー作りが進められました。「どんな言葉がいいかな」「自然という言葉はどう?」「学校美術館らしさも入れたいな」。そんな子どもたちのなかから出た思いを、一つひとつ丁寧につなぎ合わせて決まった言葉は、「自然の中の輝き。でした。自然豊かなこの学校にある美術館で、作品たちがキラキラと光を放っている——そんな情景を、自分たちの言葉で形にできた瞬間でした。悩み抜いた末にこのフレーズが決まったときの、子どもたちの喜びに満ちた笑顔は忘れられません。企画展を創り上げることを通して、子どもたちにとっての美術館が、ぐっと身近な存在になったと感じます。「自分たちの美術館だ!」と、今では、委員会の子どもたちにとって、美術館は誇らしい存在になっています。そうなれたのも、何度も学校に足を運び子どもたちと一緒に悩んでくれたシンビズムの方々のお陰です。委員会のメンバーは半年で交代してしましますが、この思いを途切れることなく繋いでいきたいと思います。

